

誰が決めている？短歌の価値 高山邦男

短歌作品の価値や歌人への評価は当時と現在では変わってくるもので、また、時代の移り変わりの中で変化したりする。例えば、「心の花」誌で連載が始まった平田英夫「西行の詩想」の中で「源頼政は、平安時代末期には大歌人として認識されており、その評価は、鴨長明やその歌の師である俊恵周辺の歌人にとって西行をはるかに凌駕していた。」という記述に認識を新たにしたり、若山牧水の評価の変遷（十月号「ほろよいインタビュー」参照）など、様々な方々の研究や評文の積み重ねにより評価が決まってくる。ただ、それは現時点での評価や価値観なので当然ながら時代が下ればまた違ったものになっていくはずである。

それでは、今生まれてくる短歌作品の評価はどうなのだろう。歌謡曲だったらヒットするかしないか、小説でも商業的に成功するかしないかは重要だが、短歌界はかなり事情が違う。ただ、良い悪いという評価は必ずあり、いい歌もあまり褒められない歌もあるが、人気テレビ番組の俳句の某先生みたいに点数化できるような絶対的基準などあるはずもない。過去においては結社同士の争いが有ったり、新しい短歌運動が起こったり、歌壇史を位置づける流れの中で価値を主張する評が生まれてきた。さて、現在はどういう時代なのだろうか。岡井隆は昭和文学全集35（小学館）の「昭和短歌史」の中で次のようなことを述べている。

赤彦の歌論書『歌道小見』は、今読んでも教えられるところの

多い本である。その中に、比喩という技法を軽蔑し、拒否した項がある。（中略）いまや、暗喩などということとは、ことごとしく言う必要がないほど常識化している反面、ほとんど比喩表現に関心をもちたくない中・高年層の短歌がふえている。このことは、短歌が、三度目の、革新期のおとの豊熟の時期に入ったことを意味するのかも知れない。

この三十年以上前の認識が現在でも当てはまるのか否かは私には分からない。ただ、論争の流行らない現況は豊熟化しつつある状態と考えると腑に落ちる。その中で、誰かが現代短歌の価値観を決め、方向性を示している。当然、深い知識や感性が必要で高度な鑑賞力が必要な作業である。そして、その役を担っている人たちが新聞歌壇の選者や各種短歌賞の選考委員をしているはずである。その中でも現代の歌壇で最も権威のある賞と言われているのが「逍空賞」で、今年の第五十八回は吉川宏志『雪の偶然』が受賞した。これから、吉川さんは短歌の価値を決めていく最高権威の一人になるはずだ。その選評の中で佐佐木幸綱は次のように述べて推している。

現代短歌が古典和歌、近代短歌との緊張関係を失ってしまったら、気の利いたツイッターと同じになってしまいうだろう。この歌集には短歌が気の利いたツイッターにならないための配慮、工夫がさまざまなされている。

短歌には短歌の価値があり、それはどういった所にあるのかという視点が明瞭に述べられている。これから更に拡大していくだろうSNSの時代に現代短歌がどうあるべきか、危機の提示とこれからの道を照らす標示として読んだ。